

---

# 天使のツバサ

花梨糖

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

天使のツバサ

### 【Nコード】

N2212T

### 【作者名】

花梨糖

### 【あらすじ】

「天使が家に住んでるって嬉しくねえ……」突然悪魔から狙われることになってしまった普通の人間、海斗。それと同時に変な天使が住み着くことになり。そして幼馴染や根暗クラスメイトの正体も明らかになっていく。

天使と悪魔と人間の絆の物語

## 序章（前書き）

厨二病全開のフォントタジーモードキですがよろしくお願ひします

## 序章

神がまず創ったのは『天使』だった。

しかし天使だけでは世界のバランスがとれず神は『悪魔』を創った。

天使と悪魔。

彼らは互いを毛嫌いし争い続けてきた。しかし天使の力が弱まり悪魔の力が増大してきていた。

人間が創られ悪意により悪魔の力は更に強まることとなった。そして、善意が極端に減ったため天使の力は降下の一途を辿っていた。

天使たちは戦力不足を補うために天使一人一人の力を増大させることを目指し学び舎を設立した。

天使の学び舎。若き天使達でいつも賑わっている広場はいつにもましてたくさん天使が集まっていた。その理由は広場の掲示板に貼り出されているある内容が原因だった。

「ちよお〜つと、ど・い・て！」

人ごみを掻き分け掲示板に近づこうとする一人の天使。腰まである綺麗な金髪はもみくちやにされてボサボサになってしまっている。やっこのことで掲示板の前にたどり着くと目を凝らし何かと照らし合わせるように手に持っていた紙と掲示板を交互に見る。

「Aの三三番！Aの三三番……ない」

肩を落とすとぼとぼと掲示板から離れる。その様子を見ていた他の天使がひそひそと囁く。

『また落ちたのかな……？』

『仕方ないって。落ちこぼれチームだもん』  
『本人たちもやる気あるのかないのかわからないもんね』

この学び舎では一定の学習を終えると魔界、人間界に赴き任務を遂行し一人前の天使となれる。

任務は応募制だが成績や素行など色々込みで抽選で選ばれるため彼らはまだ一度も任務に当たったことがない。

いわゆる『落ちこぼれ』なのだっただ。

「ユラちゃん！ どうでした？」

「駄目〜！ またはずれ！ 今回は四つ応募したのに全部駄目だったよ〜」

「これで任務不受理三百六十五目だな。もう諦めたほうがいいんじゃないか？」

ユラと呼ばれた金髪の天使が向かった先には大きな広場があり二人の天使がいた。

一人はおっとりとした雰囲気を漂わせる少女のようで残念そうに目を伏せる。紫色の髪はウェーブがかかっていてかなり長い。

もう一人はツンケンとした空気を纏う少年のような天使で青黒い髪は短いがあまり整えておらずボサボサに見える。

少年のほうが面倒くさそうに深いため息をつく。

「どうせ上で俺たちに任務が行かないようにしてるんだろ。無理だ無理。こんなところで努力しても何も変わらないって」

「もー！ そんなことばっかり言ってるから駄目なんだよ！ ショウはもつと前向きに！ シオンも頑張ろう！」

ユラは声を張り上げ二人の手をとり万歳のポーズをとる。苦笑するシオン。鬱陶しそうな顔を浮かべるショウ。

すると次々と天使達が集まってくるのに気づき三人は整列をした。次の瞬間、天使を統べる天使長が広場の壇上に現れる。

柔らかかそんな金色の髪に美しい青い瞳。溢れ出る威厳は天使を統べるにふさわしいと言えるだろう。

「静粛に！ これより天使長様直々にある特別任務を言い渡す！」  
集まった天使達が息を呑み緊張が走った。

「みんな、今回は天界、ひいては世界に関わる重要な任務だ。しかしあまり多くを派遣することができない特殊な事情があるため私たちが選んだ三人、つまり一チームを派遣する」

天使達はざわつき動揺を隠せない。一方で三人は違った。

「世界に関わる重要任務だってさ〜、すごいね〜」

「私たちには縁遠いお話ですね」

「これが終わったら鍛錬でもするかー」

完全に他人事である。整列できたのも最初のうちだけで今は体勢を崩したり腕を伸ばしたりと自由だった。

その様子をチラリと視界に入れた天使長は気づかれないように僅かに嘆息し言葉を続けた。

「これをみなにも伝えるのは彼らの手助けをしてほしいこともあるが隠し通すこともできないと思ったからだ。詳細は追って説明するでは、任務を遂行する三人を発表する。」

その場にいた全員　ユラ、シオン、シヨウを除く　が沈黙する。自分達を選ばれるだろうか。それともあいつらだろうか。そんな気持ちが見て取れた。

三人は本当に他人事だと決めつけ欠伸すらしてる始末だった。

静寂を破る天使長の声が強くその場に響く。

「Aの三二、ユラ、シオン、シヨウ。今回は君たちに任せる。詳細を説明するため後できなさい」

その言葉に時間が止まったかのように静まり返り天使達に動揺が走る。

「え、あいつらって……」

「噂の落ちこぼれチーム……」

「一度も任務成功どころか受理すらされたことないって……」

しかし、一番驚いているのは当の本人達だった。

「えっ？」

「へ？」

「はぁ？」

素っ頓狂な声で驚く三人はこれから起る大事件の全貌をまだ知らなかったのだった。

## 平凡の朝

平凡なことを毎日平凡な気持ちで実行することが、すなわち非凡なのである。

誰かの言葉だったような気がする。

「弁当持ったな……よし、今日もがんばるぞー！」

平凡すぎるほど平凡な俺、汐崎<sup>しおさきかいと</sup>海斗は朝の日課である弁当作りを終え今しがた学校へ向かうところだった。

鞆を掴み、玄関から学校へ向かう道に進み携帯を開き時間を確認する。やや遅めだがこのまま行けば遅刻はしないだろう。

現在一人暮らし。父親は海外で、詳しいことはわからないが何かの研究をしているらしい。母親は俺が小さいときに死んだらしく写真も残ってないのでどんな顔なのか知らないままだ。

しかし別段、困ることもなければ寂しいなどと思うわけでもなく解放感のある生活を満喫していた。

父親が定期的に送ってくる生活費は一般家庭の水準より高いと判断しているがあんまり使い道がないので地味に貯金に当てている。

それらを含めても自分を平凡すぎるほど平凡と自称するにはそれなりにわけがある。

運動、頭脳、見た目ともに標準。部活なし、委員会なし。更には夢なし。友達はそこそこだが彼女はいない。

刺激を求めているというわけでもないが平凡すぎるのもそれはそれでどうかと思う。

「海斗ー！ 待ちなさいー！」

突然後ろから自分を呼ぶ声があったので振り返る。そこには見覚え

のある幼馴染の姿があった。

頑張つて手入れしていると言っていた髪をポニーテールしていて自転車を立ち漕ぎしながら近寄ってくる。

「おーっす、恵美<sup>めぐみ</sup>。珍しいな、こんな時間に登校なんて」

「ちよつと寝坊したのよ。あんたは徒歩でしょ。間に合うの？」

ややスピードを落としてくれた恵美は俺と並ぶ形になり顔を覗き込んでくる。

こっそり男子の間では美人と称されているが昔から見慣れている俺としてはまあ可愛いんじゃないのを感じた。

「なんとかなるだろ。心配してくれるんなら後ろ乗せてくれよー」

「二人乗りはだーめ。せいぜい頑張りなさいな」

無情にもそう告げると自転車のスピードを早め一人で学校に向かってしまった。

俺も急いだほうがいいな。そう思い駆け足で通学路を進む。

角を曲り、そして 何か踏んだ。

「ふぎゅー！」

奇声を発したそれは金髪の美少女 多分年はさほど俺と変わらないくらいの。

外国人だろうか？ そう思っているとあることに気がついた。制服を着用している。しかも俺の学校のものだ。

「ううー、なんか変な空気ー。頭クラクラするよー……」

ぶつぶつと何か呟きながら起き上がると俺に気づき、じっと見つめてくる。

「あれ……もしかして」

「は？ ええつと、踏んで悪かったな」

一応謝つてく。しかし道端に落ちている美少女。明らかにシユールだ。この時代に行き倒れとかありえないだろうし。

すると少女はニコツと満面の笑みを浮かべ俺の頭を撫でる。その

意味不明な行動に思わず固まる。

「え、あの………?」

「また後でねー! 今はちょっと色々しなきゃいけないからー」

そう言っつて角を曲がる。思わず後を追いかけてようとすると少女の姿はそこにはなかった。

「ど、どういうことだ………?」

わけがわからないまま立ち尽くしていると携帯が鳴り我に返る。

携帯を開くと友達からのメールだった。

『お前何してんの? まだ家? 遅刻するぞー』

「やっべえ!?! 走つても間に合うのかよ!」

先程の少女のことはとりあえず頭から捨て去りただ学校へ向かう。

一瞬、純白の羽が視界に映った気がしたがそれを気にする余裕もなかった。

この時すでに、俺の平凡は急激に崩壊していた。

転校生は？

廊下を全力でダッシュ。自分の教室の扉を豪快に開け滑り込むように教室へと入った。

「セーフ！ セーフだよな！？」

「ギリギリなー。今日こそ遅刻するかと期待したのに」

そう言っただけで茶化してくるのは悪友の恭一。なぜか俺よりモテるらしい。

すると恵美も近寄ってきて少し心配そうな顔をした。

「何かあったの？ やけに遅かったね。あたしと会ったとき遅刻しないみたいなこと言ってたのに」

「余計な心配すんなって。まあちよつとしたトラブルだよ」

乱暴に鞆を机に乗せて大きく息を吐く。呼吸を整え椅子に座ると狙ったかのように先生が教室に入ってきた。

担任の神原美穂かんばんみほという先生で国語の教師だ。

ちよつと抜けてそうなる若い女性だが女子には好かれているらしい。なんでも可愛いとかなんかで。

まだざわついていいる教室をなんとか静かにさせると一息置いて言った。

「はいはい、静かに。えー、実はこのクラスに転校生がくることになりましたー！ みんなわかってると思うけど仲良くねー！」

そのセリフにクラスメイトは浮き足立った。この時期、五月に転校生なんて時期はずれなうえに転校生自体珍しいので気になるのだろつ。

ガラスと扉の開く音がやけに頭に残った。

長い、綺麗な金髪。芯の強さを感じさせる瞳はなんと青。多分金髪碧眼と呼ばれるものなんだろう。

顔は日本人っぽくはない　とそこで気づいた。

『また後でねー！　今はちょっと色々しなきゃいけないからー』

さつき踏んだ美少女だ。絶対に。

先生がスラスラと黒板に名前を書いている。その間、クラスメイ  
トたちは転校生を見て驚きを隠せていなかった。

『金髪碧眼って外国人？　超かわいくない？』

『すっげえ美少女じゃん！　どこから来んだ』

『なんでこんな時期に転校なんだろうな。わけあり？』

大半が男子という悲しい事実。女子は女子で反応しているが男子  
の方が圧倒的にざわついている。

名前を書き終えた先生がこちらを向き黒板を示す。

「天野由良あまのゆらさんです。まだ引越してきたばかりらしいので皆さん  
色々教えてあげてくださいね」

天野はにっこりと笑顔を浮かべる。俺と目が合った気がしたがす  
ぐに視線が窓のほうに移ったのでよくわからなかった。

「じゃあ天野さん、あそこの席に座ってください？」

先生が指したのは俺の右隣。ちなみに俺の席はなんのいじめか  
一番後ろの左右後ろが誰もいない状態の席である。前は恵美だがま  
わりに人が少ないのは悲しいものだと思う。

ゆっくりと指定された場所近づく天野。そしてすぐ目の前に来て  
そこでとまった。

じーっと俺を感情のよくわからない目で見つめる。

そして次の瞬間、なぜか天野に抱きつかれていた。

「は……？」

いきなりのことに驚く俺。

「え　」

なぜか絶句する恵美。

そして、

『えええええ！？』

大げさなクラスメイトたちの困惑の叫び。

「あら、汐崎君、天野さんと知り合いだったの。それじゃあ色々教えてあげてね」

なぜか勝手に面倒を任せる先生。

そして朝のHRは終わりとはかりに教室から立ち去った。

ついていけてない俺をよそに天野はものすごく嬉しそうに笑う。

「よかった〜！ちゃんと会えたね！ これからよろしくね、カイト」

「え、なんで名前」

「海斗、あんた……」

なぜか恵美が怒っているように見える。そしてクラスメイトたちは勝手な憶測を飛ばしあっている。

『え、海斗って恵美ちゃんと付き合ってるんじゃないのか』

『二股……俺なんか彼女どころか女子ともまともに話せないのに…』

『汐崎君真面目だと思ってたのに浮気？ 恵美かわいいそう』

『さいてー。汐崎君ってそういう奴だったんだ』

なぜか俺と恵美が付き合ってる前提で話が進んでいるが付き合い合っているわけない。幼馴染だから話しやすいし家も近いのでよく一緒にいるだけだ。それを周りは勘違いしている。

恵美は怒っているのかむしろ笑っているのかすらよくわからない表情を浮かべていた。

「海斗……よかったわね……かわいい彼女ができて……」

「おい待て、何言ってるんだお前まで。俺は」

「海斗！ お前俺に内緒でそんなかわいい子と知り合いだなんて…

…ずるいぞー！」

「恭一まで……頼むからお前らの話を」

その時、ざわついたを通り越して騒がしくなった教室の扉を必要以上に音を立てて入ってきた生徒がいた。

霧夜優矢。<sup>きじやゆうや</sup> 頭脳よし、運動神経よし、顔よしの超イケメンと女子から人気な奴だ。

しかしまともに会話したこともなければ関わることもない。霧夜自身、あまり他人と関わろうとしないので話に聞いたことしか知らない。

「お前らうるさい黙れ。くだらないこと騒ぐな」

霧夜は不快そうに顔を歪め教室中に聞こえるように、けれど大声ではない音量で言った。

その言葉に騒いでたやつらは凍りついた。

顔はいいけど性格難アリの霧夜は黒い噂が絶えない。そのためか機嫌の悪そうな霧夜を逆立てないようにほとんどの奴が静まり返る。一時間目の授業が始まるためかみんな小声で話したりしている。

天野はやつと俺から離れてくれた。

「あのさ、俺お前と会ったことないよな？ 確かにさっき踏んじやったけど」

「え？ 会ったことないよ」

その言葉に少し安堵し次の言葉で更に不安に叩き落とされる。

「でも、アタシは知ってるよ。カイトのこと」

なんか恵美がまた怒ってるような笑ってるような表情になってる。めちやくちや怖いんですが。

そしてなぜか霧夜がこちらを見て舌打ちしてきた。なぜだ。

そんな混乱のなか授業を告げるチャイムのおかげでとりあえず質問責めは免れることができた。

が、昼休みになっ途端爆弾投下されたような事態が起こった。

「かーいとっ！ 案内してー」

天野がぴよんと俺に飛びついてくる。

その様子を見ていた恵美は後ろに鬼でもいるんじゃないかってく

らい怒りを露にしていた。

恭一は困ったような面白がるような微妙な表情で俺から距離をとっている。触らぬ神にんたとやらか。

「とりあえず、不純異性交際は認めないわよ。そ、そもそも彼女ができたならあたしに言ってくれたら……」

後半は小声だったため聞こえなかったがなにやらもじもじとはつきりしない。

すると天野が焦れたいのか俺の襟首を掴み教室から立ち去ろうとする。

「ちよ、待って」

思ったよりも強い力で引きずられ驚いていると天野は気がついたように俺の弁当を勝手に取り出し教室の外へと連れ出した。

教室から出る際、恵美と目が合って……その目付きに思わず身震いしてしまった俺であった。

由良と海斗が出ていった後の教室はやはりというか騒がしかった。憶測や妄想が飛び交い彼女を不愉快にさせていた。

「まさか……もう来るなんて……」

不愉快になる原因は二つ。

海斗に馴れ馴れしすぎる態度。そしてもう一つは

「人間舐めないでよね……」

恵美は髪を苛立たしげかきあげ強く拳を握り悔しそうに舌打ちした。

天野は人気のない廊下につくとようやく離してくれた。

俺のほうをじーっと見つめ愛らしい笑顔を向ける。こうして見るとやっぱりかなり可愛い。

「あのねあのね、アタシ、カイトのためにここに来たんだよ！」

「ごめん、意味が分からない」

会ったことはない。だが天野は俺のことを知っている。無論、俺は有名人でもないし部活とかもしていないから他校と関わりもないので名前も知られていないはずだ。

ではなぜ天野は俺のことを知っている？

「あれ？もしかして知らないの？」

首を傾げる天野は思いついたように言った。

「そういえばアタシ、天使だって言っただけじゃなかったね！」

当たり前のように、満面の笑みでそう言った天野を見て俺は確信した。

こいつ、頭逝ってるな。

電波に付き合ってもらえない。早々に立ち去ろうとすると強く引き止められた。

「アタシねーカイトを護るためにわざわざ来んだよー！でもね、仲間とはぐれちゃって困ってるのー。どうすればいい？」

俺に聞くな。そしてそろそろ危ないこと言っくな。

ぶーぶーと文句を言っている天野を振り払おうとし角を曲がると誰かにぶつかった。

「あ、ごめ」

「邪魔だ」

不遜に言い放つのは霧夜。相変わらず不機嫌そうな顔で睨んでくる。すると天野に視線を移したただ一言吐き捨てた。

「お前も、こいつも存在そのものが不愉快だ」

それだけ言っただけで霧夜は去った。

天野といい霧夜といいこいつらは人を混乱させたいのか。

天野は霧夜の言葉が気に食わなかったのか頬を膨らませながら何

か言っていた。

「何よー、そんなに嫌わなくてもいいじゃん。アタシたちだって任務なんだし……」

その隙に俺は天野から逃げ出す。

「あっ、ちよっと！」

天野の制止の言葉を無視し次の授業まで適当に時間を潰すことにした。

転校生は？（後書き）

これからカオスになっていくと思います。感想とかももらえると嬉しいです

## 日常の崩壊と再生

放課後、天野は女子たちに詰め寄られていた。

「天野さん、部活とか興味ない？」

「折角だから体験に来てよ！」

「ぶかつ……？ よくわからないけどちよつとなら」

そのまま女子どもに引きずられていく天野を追いかける恵美。恵みの意図が全く見えない。

恭一が近寄ってきて苦笑しながら聞いてきた。

「んで、実際由良ちゃんとは何なんだよ」

「いきなり名前呼びかよ……。別に何にもないって。ちよつと電波入ってた」

「電波娘か……。いいじゃないか」

こいつは何が言いたいんだ。守備範囲が広いと自負している恭一は天野に興味があるらしい。

俺よりモテるくせにちよつと軽いところがあるんだよな……。長く付き合つてるところを見たことがない。

「そついや今日は特売日だったな……。早く帰るか」

「お前そついうところは変に家庭的だよな。まあ、お前らしいけどさあ」

恭一は笑いをこらえながら俺の背中を叩く。何かおかしいところあったのか？

首を傾げながら教室を出て特売をしているスーパーへと向かった。

その頃。

ドリブルの音が体育館に響く。バスケット部の面々を前にして由良は自称初めてのバスケットを体験していた。

現役バスケット部たちが驚愕するほどの運動神経で次々とシュートを決めていく。

「天野さんすごい運動神経いいのね！ 本当に未経験？ バスケットはどう？ 楽しいわよ！」

「何言ってるの、天野さんはソフトボール部のほうが向いてるわ！」  
「あんなたちうるさいわね！ 天野さんはテニス部に入るべきよ！」  
女子たちが不毛な争いを繰り広げてる中、恵美が由良に話かけていた。

「天野さん、あのさ……言いたくないんだけどその……」

「ふえ？ どしたの」

由良は傍にあつたタオルで汗を拭い貰ったジュースを飲んでいて、その様子を見て恵美はわずかに躊躇い言葉を飲み込んだ。

「ううん、何でもないよ」

いずれくるその時は今ではないから。

「おーし、久しぶりに買いだめしたなあ。しばらくもつだらうけど少し買すぎたかな」

両手にスーパーの袋を持ち帰路につく。

家に帰っても自分一人なので食事くらい適当にしてもいいと思っただことがあるが恵美にちゃんと食べなさいとお説教を食らって以来ちゃんと自炊をしている。

元々料理は嫌いではないが独りで作って独りで食べるため虚しいところがある。

いつもと変わらぬ帰り道は日も暮れかかっている少し早足になる。すると、先程から抱いていた違和感に気づいた。

人がいない。

この時間帯なら学生とか買出し帰りのおばさんとかがいてもおか

しくない。

なのに一人も通らない。

さすがにおかしい。そういえばスーパーを出たあたりから人を見ていない。

周りを見回すと視界がぐにやりと歪んだような感じになる。

そのまま風景は溶けるように崩れ荒れ果てた大地が現れた。

「なんだよ……どういうことだよ……！」

わけがわからずその場で叫びを上げるも反応するものはどこにもいない。

ふと、後ろを振り向くと見たこともないような怪物がそこにいた。

「ひっ………！」

思わずその場にへたりこんでしまう。怪物は息を荒くして俺を睨んでいた。

怪物が動いた瞬間、俺は本能的に感じた。

喰われる！

動けと命じているのに体は言うことを聞いてくれない。

駄目だと思い目を瞑る。

しかし、痛みなどは感じず特に変化は感じられない。

恐る恐る目を開くと巨大な口を開けた怪物をファンタジーに出てくるような剣で抑えている　天野だった。

「え、何で……何なんだ………」

「後で説明してあげるね。少し待ってて！」

少々早口で告げる天野は凜々しくて、学校のとくに電波なこと言っていたのが嘘のようだ。

「アタシは！　天界からの使い、天界戦士のユリスラル！　人間界での名を天野由良！」

一息に叫ぶと怪物を押し返し剣で切りつける。

怯んだ怪物は天野と距離を取り唸り声をあげる。

「本気出すまでもないねっ」

それは一瞬のできごとだった。

怪物の体はぐらりと傾きその場に崩れ落ちた。

「魔物討伐かんりよっ」

場違いなほど明るい声。差し伸べられる綺麗な手のひら。

これは夢だろうか？

夢でも現実でも何でもいい。だから

。

俺の平凡を壊さないでくれ。



「わっ、どしたの？ あ、お腹すいてると機嫌悪くなるって聞いた！ はい、これっ」

天野は俺の口に晩飯に作った肉じゃがの人参を突っ込んだ。

……傍から見たら「あーん」してるような構図。

「悪い冗談だつて言ってくれよ……つか意味わかんねえし……何で天使がこんなところにいんの。さっき襲ってきたの何。何でお前当たり前みたいに晩飯食ってんの！」

「うーん、簡単に説明するとね、カイトってものすごおおく強い力があつてそれを狙う悪魔がいるの！ さっきのは悪魔が支配してる魔物か下級悪魔のどっちかだと思う」

へーそうなんだ！。もう馬鹿らしすぎてなんて言えばいいんだ。

強い力？ 悪魔？ 十七年間生きてきてそんな強いだのなんだの感じたことはない。運動頭脳容姿、どれをとつても標準な俺が？  
ねーよ。

「そして！ アタシたちはそんなカイト守るために天界から遣わされた天界戦士。できるだけ離れないようにするために一緒に住むんだよ！」

「住むこと確定事項かよ！？ 帰れ！」

「え〜でも〜一人でいるとさつきみたいにく魔物とか悪魔に襲われちゃうよ〜」

「うっ……」

それは嫌だ。まだ死にたくないです、はい。

「カイトってね、悪魔とか天使の力を強化したり弱体化させたりする能力を持っていて、それで悪魔が自分の力を向上させようと狙ってるの」

「へー、どうしたら強くできたりすんの」

やり方分かれば適当に強くして帰ってもらえるのに。

やや現実逃避したいがためにそんなことを考えてしまう。

「聞いた話だと覚醒すれば望んだ存在を強化できるらしいよ。あと血肉を食べるとか……」

食べるってそのまんまの意味じゃないよな。グロい、グロすぎる。  
「そういえばせーこういつてやつもって言ってたけど……そのへんアタシはよくわかんないんだよね」

聞こえなかった。俺には何も聞こえなかった。そうだろ、俺。想像以上に俺の置かれてる状況はやばいらしい。

「天界に連れてくとカイトに負担かかるからとりあえず様子見つてことでアタシとチームの仲間二人が遣わされたんだけど……迷惑かな？」

「うん、果てしなく迷惑」

「なんで〜！ 天使の加護だよ！ 泣いて喜ぶよ、普通！」

「別の意味で泣きそうだよ！ 命狙われてるし天使（仮）は家に住み着こうとしてるしお前食う量半端ないから食費跳ね上がりそうだし！」

冷凍しとこうと思つて米二合炊いたのに全部なくなってるじゃんかよ。いつ食ったこいつ。肉じゃがも明日の弁当にいれようと思つたのに全部食いやがった。

はああと深いため息をつくと何を考えたのか天野は見当違いな発言をした。

「大丈夫！ 人間界の言葉に『寝る子食べる子よく育つ』ってのがあるって！」

「ねーよ！ 『寝る子は育つ』だろうが！」

今日の俺、突っ込んでばかりな気がする。

疲れた、もう寝たい……。

「俺もう寝るわ……わけわかんないことばっかで疲れた……」

「アタシも寝るー」

なんか普通に部屋にまでついてこようとしてるんだけどこいつ。お前はソファにでも寝てる！ あと朝は別々に登校だからな！  
ダンツと自室のドアを閉めベッドに寝転んだ。

天使、悪魔 俺にどうしろっていうんだ。

わかんねーよ……わかんねーよ……。

今はただ、現実から目を背けるために眠りについた。

その頃

とある公園。

「うーん、二人とはぐれてしまったみたいですね……どうしましょ  
う……」

ウェーブがかかった紫色の髪を持つ少女。困ったように辺りをき  
よるきよると見回す。

「とりあえず、気配を辿ってみますか……」

そしてもう一つ

少々ガラの悪い人間が集まる街。

そのこの、薄暗い路地裏でひとりの少年を囲むチンピラが数人。

「オイ、そのガキイ、こんな時間にうるついてんじゃねーぞオ」

「オレらの縄張りにずかずか踏み込みやがってよオ」

「……低俗すぎて笑えんな、人間」

青黒い髪をかきあげ鬱陶しそうに顔を歪める少年。

「貴様らのような低能がいるから俺様たちが苦労するんだ。わかっ  
たなら今後己を改めることだな」

完全に見下したように笑う少年にチンピラたちは襲いかかった。

## 誤解されるようなこと

昨日、夜に米もおかずも残らなかったなので早めに起きて朝食と弁当を作る。

いつもより少しだけ早く起きたので欠伸を何度もしているとソファでうずくまっっている天野が目に入った。

呑気に涎を垂らしているアホ面全開だ。

適当に弁当に詰める作業をしていると呼び鈴の音が聞こえてきた。こんな時間に誰だろう。扉を開けるとそこにいたのは恵美だった。「め、恵美？ どうしたんだ？」

「一緒に学校行くこうと思っつて。早めに起こさないとまた遅刻ストレスレになるかなっつて」

顔を俯けたまま喋る恵みにどこか違和感を覚えた。具合でも悪いのか。

「今弁当作っつてたんだよ、まだ朝飯も食っつてないし……てか早すぎだろ」

「ああ、うん、そうだよね……海斗の料理久しぶりに食べたいな」

「はいはい、今度な。別に今食べれるならあがって食っつても」

そこで俺は重要すぎることを思い出した。

今、ソファで天野が寝ている。それを見た恵美は何を思うだろうか。

現在午前六時なのにもかかわらずクラスの女子が健全な一人暮らしの男子の家で寝ている。

字面だけ追っつても無茶苦茶だ。

言い訳するにしたっつてどうしろと？ 拾った 犬じゃあるまいし。朝起きたら居た ありえないだろ。泊まった 何で？

どう考えても逃げ道がない。とりあえず家にあげるのだけは阻止しなければ。

「あ、じゃあ少しあがらせてもらおうかな。朝ご飯、食べる気しなくて今日食べてなかったんだけど……」

「いや待て、やっぱ無理だ。ごめん」

「えっ、何で一瞬で言ってること変わってんの？ 少しくらいいいじゃない」

「無理無理無理。今めっちゃ散らかっててあげるわけには」  
扉を閉めようとすると思美は納得がいかないのかそれを阻止しようとして手を掴み強く引つ張る。

双方の力がせめぎあい扉が中途半端な開き方になった状態が続く。地味にどちらかに動くが基本は動かずぶるぶると揺れている。

「少しくらいなら気にしないし！ てか何でそんなに必死なの？ 何かやましいことでもあるの！？」

「やましいこととか全然全く一切ねーよ！ とりあえず後で、なっ  
「カイトー……？ 何してるのー……？」

後方から聞こえてくる眠そうな声に驚き扉を引つ張る力が弱まった。思美はその隙を見逃さなかった。

思いつきり、扉壊れんじやねーかってくらいの力で引つ張り、家へ侵入した。

そして、凍りついた。

「あ、れ……天野さ、ん」

「ううん……おはよーカイト、あつ、春川さんだよね？ おはよう

「……海斗？」

思美の視線が痛い。本気で軽蔑してるような目をしてる。というか怖い。

思美はそのまま出ていってしまった。

「春川さん、どうしたの？」

「……終わった、俺の人生終わった」

「ほへ？」

絶望に沈む俺に天野は首をかしげたままだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2212t/>

---

天使のツバサ

2011年8月4日03時14分発行